



第5回 大学コンソーシアムあきた 高等教育セミナー

テーマ:

学生エンゲージメント

大学を取り巻く状況・環境が大きく変化する中、カリキュラムの体系化やアクティブラーニング型授業の導入、留学やインターンシップの機会の拡充、学生支援の充実など、各大学では様々な質保証・質向上の手立てが講じられています。一方、教育改革の進捗とは裏腹に学生の学びに対する受動性を示すようなデータもみられます。誰のための何のための改革なのか、改めて問い直す時期に来ているのではないのでしょうか。その鍵となるのが「学生エンゲージメント」です。過度な成果主義から学びのプロセスへと重心を移し、認知的側面のみならず情緒的側面を重視しながら、学生・教職員双方による主体的・対話的で深い「関与」によって、学生の成功を実現しようという包括的な概念です。このセミナーでは、なぜ学生エンゲージメントが重要なのか、学生エンゲージメントや自立を促す大学教育とはどのようなものなのか、大学コンソーシアムあきた構成機関における教育の実践事例も交えながら紹介し、大学教育と学生エンゲージメントについて考えていきます。

令和元(2019)年

10月12日 **土** 13:00-16:30

開催時刻 受付開始12:30~

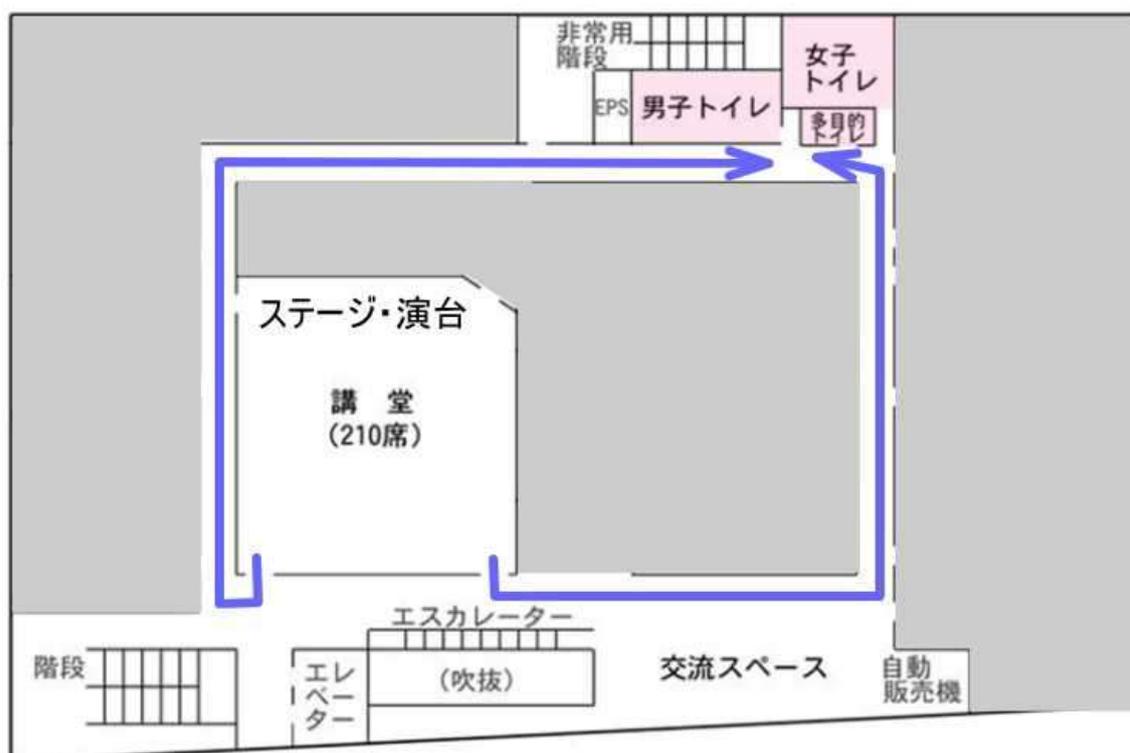
会場:カレッジプラザ 講堂 秋田市中通2丁目1-51 明德館ビル2階

大学コンソーシアムあきた

大学コンソーシアムあきた事務局
〒010-8502 秋田市手形学園町1番1号 秋田大学内
TEL: 018-889-2843 FAX: 018-889-3194

次第	
13時00分	開会 吉沢 文武 大学コンソーシアムあきた企画開発部会委員 秋田大学高等教育グローバルセンター講師
	開会挨拶 志立 正知 大学コンソーシアムあきた運営委員会委員長 秋田大学理事（教育・学生・地方創生・広報企画担当）・副学長
13時10分	基調講演「大学における学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけ」 山田 剛史先生 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授 （兼任） 大学院教育学研究科（高等教育学コース）
14時40分	休憩（10分間）
14時50分	教育実践事例報告 共通テーマ「正課内外で学生の主体性や自立を促す組織的な取り組み」 ○学習者の主体性や自立を促す取組 ～教員養成及び小学校の事例から～ 細川 和仁 秋田大学 教育文化学部 准教授 ○学生自主研究制度 ～学生の好奇心に応える教育プログラム～ 水野 幸一 秋田県立大学 生物資源科学部応用生物科学科 准教授 ○産学官民連携としてのJ R東日本寄付講座の取り組み 根岸 洋 国際教養大学 アジア地域研究連携機構副機構長・准教授 ○コミュニティデザイン演習の記録～彌高神社オリジナル御守袋デザインの実践報告～ 官能 右泰 秋田公立美術大学 美術学部美術学科 教授
15時55分	パネルディスカッション・質疑応答
16時25分	閉会挨拶 齋藤 貴子 大学コンソーシアムあきた企画開発部会世話人 日本赤十字秋田看護大学 看護学部 准教授

カレッジプラザ案内図



大学における学生エンゲージメントと自立 を促す支援としかけ

山田 剛史 / Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.

京都大学 准教授

高等教育研究開発推進センター / 大学院教育学研究科

E-mail : yamada.tsuyoshi.7u@kyoto-u.ac.jp

Website :

1

山田 剛史 (Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.) のプロフィール



【生誕】1977年12月大阪市。【学歴】関西外国語大学外国語学部、大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了。神戸大学博士（学術）。

【職歴】京都大学高等教育研究開発推進センター教務補佐員（2005.4-2006.7）、島根大学教育開発センター講師・准教授・副センター長（2006.8-2011.3）、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長（2011.4-2015.3）を経て、現在、京都大学高等教育研究開発推進センター / 大学院教育学研究科准教授（2015.4-）。

【学会関係】大学教育学会代議員、初年次教育学会理事、日本青年心理学会常任理事、『大学教育学会誌』編集委員会幹事など。この間、高等教育質保証学会評議員を歴任。

【社会活動】文部科学省大学教育再生加速プログラムペーパーレフェリー / 委員会委員、他大学のGP・AP等外部評価委員、東山中学・高等学校学習力強化プロジェクト特別委員、名古屋大学客員准教授など。

【受賞関係】大学教育学会会長特別賞（2017.3）、島根大学優良教育実践表彰（2010.7）。

【専門】高等教育研究・開発（質保証、FD、IR、学習成果アセスメント）、青年心理学（大学生研究、自己形成論）。

【テーマ】大学生の学びと成長を促す教育・学習環境のデザインと評価。

【主な著書】『生成する大学教育学』（2012年、ナカニシヤ出版、分担）、『大学のIR Q&A』（2013年、玉川大学出版部、分担）、『学生と楽しむ大学教育』（2013年、ナカニシヤ出版、分担）、『新・青年心理学ハンドブック』（2014年、福村出版、分担）、『大学のFD Q&A』（2016年、玉川大学出版部、執筆）、『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザインーアクティブ・ラーニングの組織的展開にむけてー』（2016年、ナカニシヤ出版、編著）、『学習評価』（2018年、玉川大学出版部、分担）など。

2

今日の内容

1. 問題の所在①：日本社会の構造的問題
2. 問題の所在②：大学教育改革の死角
3. 大学教育の質的転換を支えるエンゲージメント
～アウトカムからプロセスへ～
4. データで見るエンゲージメントの意義
～学生の学びと成長にどう寄与するのか～
5. エンゲージメントを高める大学教育実践
～どのような実践がエンゲージメントを高めるのか～

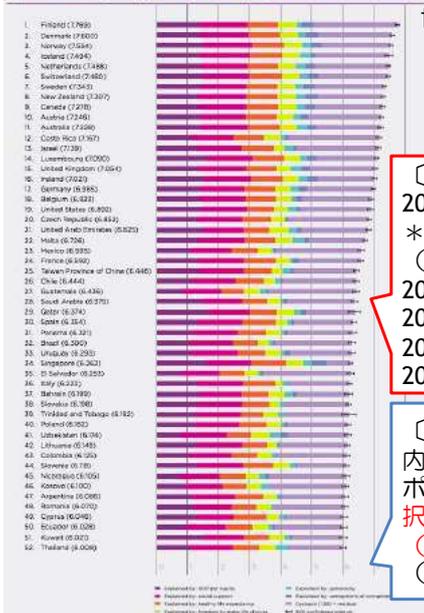
3

1. 問題の所在①：日本社会の構造的問題

4

日本人の幸福度とワークエンゲージメント（国際比較）

Figure 2.7: Ranking of Happiness 2016-2018 (Part 1)



世界幸福度調査2019
(国連, 2012年~)

〔日本の順位〕
2019年・・・58位 (156カ国中)
*G7では最下位
(過去)
2018年・・・54位
2017年・・・51位
2016年・・・53位
2015年・・・46位

〔観点〕一人あたりGDP (国内総生産), ソーシャルサポート, 健康寿命, 人生の選択の自由 (64位), 寛容さ (92位), 汚職の認識の6つ (各10段階で評価)

ワークエンゲージメントを測る「Q12」に関する国際比較調査 (米ギャラップ社)



・「熱意あふれる社員」日本は、調査対象139カ国中132位

幸福感を高めるカギを握るのは “ () ”

「主観的幸福感を決定する要因の重要度」 (西村・八木, 2018)



学歴



世帯年収額



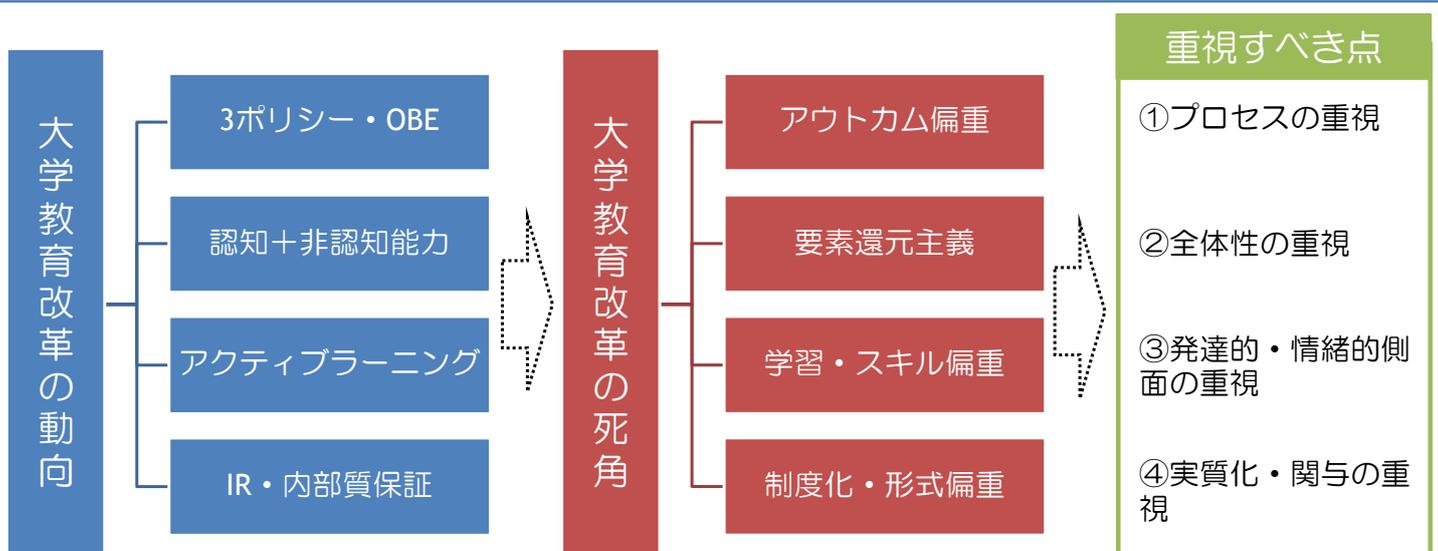
自己決定

- ・進学先の決定 (中学から高校)
- ・進学先の決定 (高校から大学)
- ・初めての就職先の決定

2. 問題の所在②：大学教育改革の死角

7

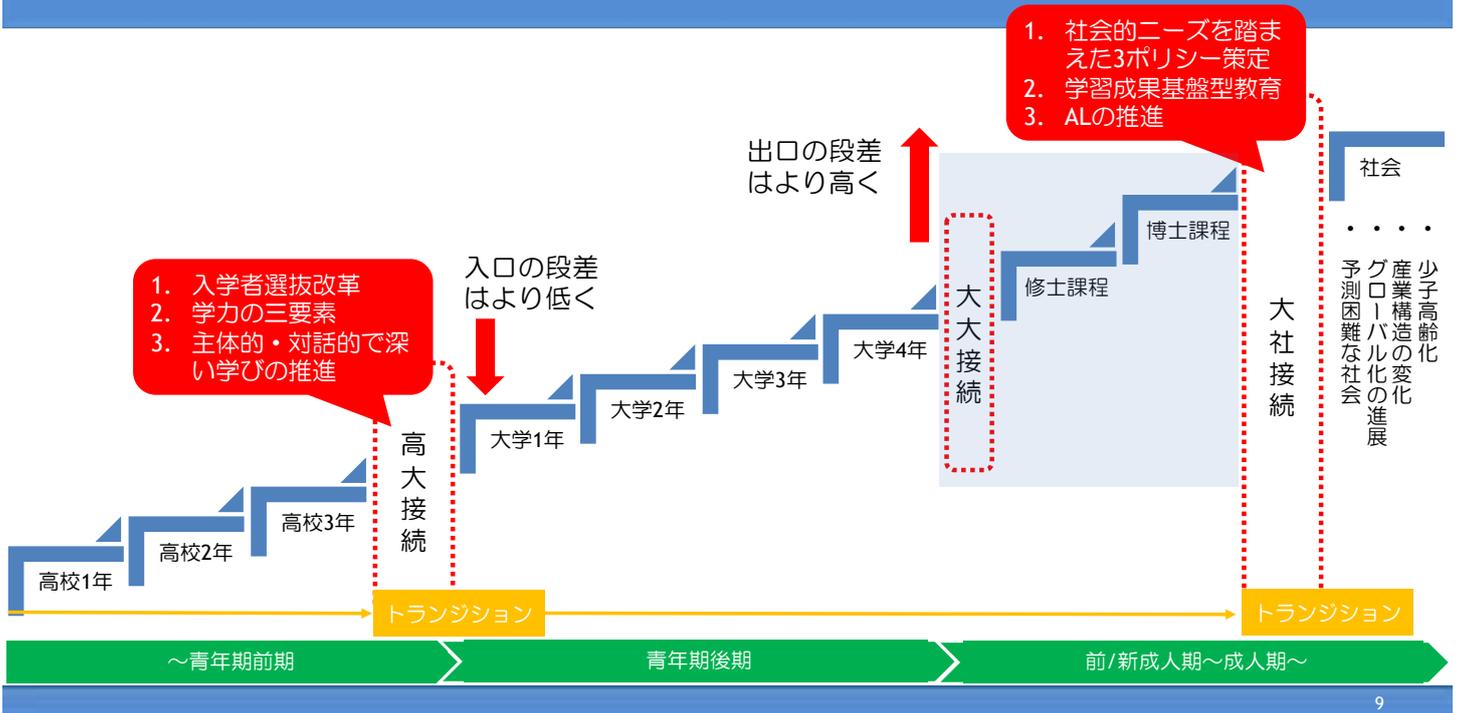
大学教育改革の動向と死角および重視すべき点



【最大の疑問】 質保証・質向上のための様々な方法・手段は導入されているが、学生は自律的学習者として学び成長できているのだろうか？

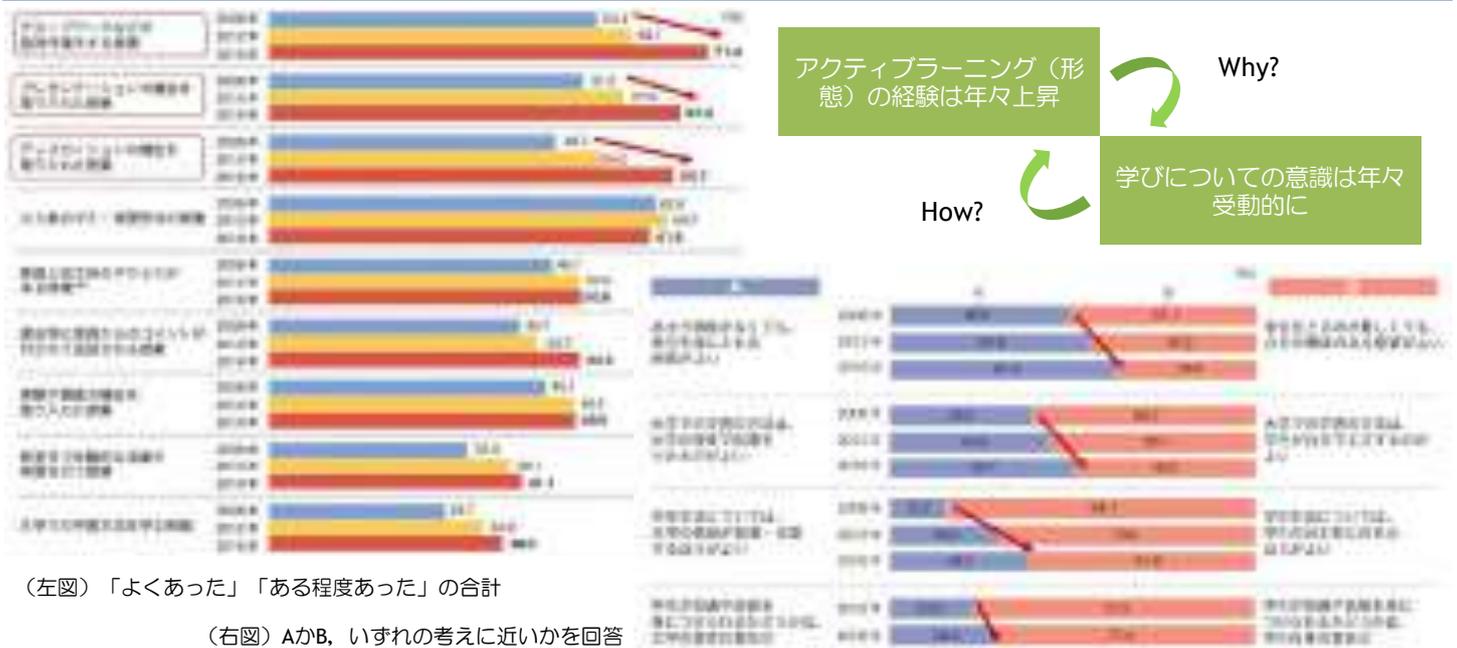
8

広がる高低差をどう埋めるか



授業は能動的に，学びは受動的に

「大学生の学習・生活実態調査2008/2012/2016」ベネッセ教育研究開発センター調べ



大学満足度は年々低下，親への依存度は年々上昇

「大学生の学習・生活実態調査2008/2012/2016」ベネッセ教育研究開発センター調べ



“関与の質” が子どもの学びと成長に大きく関わっている



3. 大学教育の質的転換を支えるエンゲージメント ～アウトカムからプロセスへ～

13

リサーチクエスチョン

★リサーチクエスチョン

「教育機関によって提供されるどのような教育・学習環境（人的・物的・制度的サポートを含む）が、学生のエンゲージメント（認知的・行動的・情緒的の3領域）を高めるのか。また、それらは学生の成功にどのような影響を及ぼしているのか」

学生の成功（Student Success）

「正課内外における教職員や他の学生との深い関わりや、自身の向き合うべき課題（自己・学習・将来など）に対する主体的な関与を通じて、期待される学習成果を獲得するとともに、心理・社会的な発達を遂げて、社会への円滑な移行（トランジション）を実現すること。また、大学で得たことを基盤に、21世紀市民として社会参画を行うとともに、自分らしく幸福な人生を送ること。」（山田，2018c）

14

学生エンゲージメント（1990年後半～）が求められる背景

大学ランキングへの不満の高まりもある

（1）プロセス指標の必要性の高まり

- 成果の情報だけでは、鍵となる経験に関する情報がないかぎり、実質的な解釈はできない（Astin, 1991）。
- 学士課程教育のよい実践に関わるプロセス指標の方が教育改善には適切であり、具体的な活動との関連が、大学による教育改善のための介入の案内を提供する（相原, 2015）。
- 政府や大学がターゲットにすべきは、アウトカムはどうすれば高まるかではなく、学生の学びへの参加はどうすれば高まるか（Ewell, 1988）。
- 教育の成果は、どういった教育を提供するかよりも、実際に学生がどういった学習を行ったかに規定される（葛城, 2006）。

（2）学生の成長・発達の視点を重視する動き

- 大学生は在学中、事実に基づく知識や一般的な認知的・知的スキルだけでなく、価値観や態度、心理的あるいは道徳的側面も含めて、多様な領域で成長を遂げる（Pascarella & Terenzini, 1991）。
- 「発達のアウトカム」と「社会経済的アウトカム」
⇒（前者）選抜性や教育資源（静的） < 教員と学生の交流や教育プログラム（動的）

大学のアウトカムを規定する決定的な要素は、学生個人のインボルブメント、エンゲージメントであり、教育機関の取組において重要なのは、アウトカムを左右する学生の学びをいかに促進できるかという点にある（Pascarella & Terenzini, 2005；小方, 2008）。

15

学生エンゲージメントの学問的系譜（相原, 2015, pp.175-178を参考に作成）

Tylerの学習時間 (time on task)(1932)	Paceの努力の質 (quality of effort)(1980)	Astinの関与 (involvement)(1984)	Tintoの統合 (integration)(1986)	Pascarellaの一般因果モデル(1985)
<ul style="list-style-type: none"> • 1930年代 • 学業に費やす時間や効果を研究 • 実働研究（service studies） 	<ul style="list-style-type: none"> • 学業達成を説明する中心的な要因を、行為主体である学生（student agency）の努力の質と捉えた 	<ul style="list-style-type: none"> • 関与の概念によって大学生の発達理論を構築 • 関与する学生ほど大学で成功する 	<ul style="list-style-type: none"> • 「社会的統合」「学問的統合」を明確化 • 個人と大学双方の関係を検討（「相互作用主義者」説） 	<ul style="list-style-type: none"> • 学生の学習と認知発達へのさまざまな大学環境の効果を評価するためのモデル • 関連研究を拡張・発展

学生エンゲージメントは一元的な構成概念ではなく、大学生の学習や発達に影響を与える大学での経験についての一連の研究をルーツとする概念を総称する用語（umbrella term）（McCormick, 2013）。

- 生涯学習
- 地域・家族
- 学校・教師
- 教室・友人
- 民族 など



学生エンゲージメント（Student Engagement）



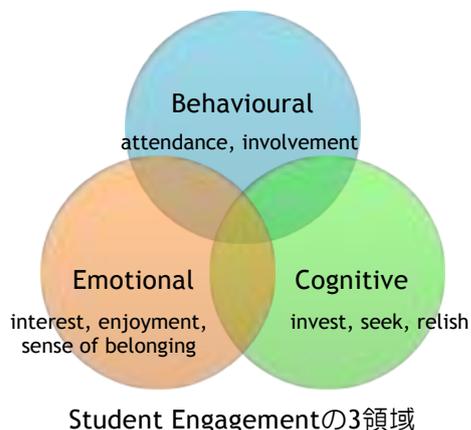
- 動機づけ
- 目標達成理論
- 自己決定理論
- アイデンティティ
- 自己効力感 など

*カレッジインパクトの存在の確認⇒CIを規定する要因の検証⇒学生エンゲージメントの重要性の確認⇒SEを規定する要因として大学が関与しうる余地の検証，という方向で発展（小方, 2008）。

16

学生エンゲージメントとは

- OECDによるPISAでは、学生エンゲージメント（生徒の学校への関わり）は「広い意味での生徒の学校教育に対する態度や学校生活への参加の意味」で用いられている（相原, 2015）。
- 「学生の学びへの取り組みや関与」という意味で、学修時間に加え、学びへの関心・意欲・態度、学びへの取り組み方などの質的なものを含み、大学が学生を学びに参画させる働きかけとも関わる、総合的な用語（小方, 2016）。
- 学生エンゲージメントは、学生の経験を最適化し、学生の学習成果や成長・発達、大学のパフォーマンスや評判を向上させるために、学生と大学の双方が投資した時間、努力およびその他の関連資源との相互作用に関係している（Trowler, 2010）。



類似概念・研究との異同

*エンゲージメントは、関与（involvement）や参加（participation）以上のものを指し、活動に加えて感情や意味づけをも含む（Harper & Quaye, 2009）。

*カレッジ・インパクトでは、学生を受動的対象（passive subject）とみるのに対し、学生を自分自身の学習への能動的参加者（active participant）とみる（Pace, 1982）。

17

学生エンゲージメントとは

学生エンゲージメント

「大学生の学習と発達を促すために、彼らの置かれている状況や文脈も考慮しつつ、大学が提供する制度や環境、教職員が日常的に行う教育・指導等における深い関与^①、学生が自らの意志で選択し、学びに対して主体的に関与するというプロセスや一連の経験^②、そして大学、教職員、学生それぞれが払う関与の質と量の相互作用やダイナミクス^③を捉える概念」（山田, 2018a : 2018b）



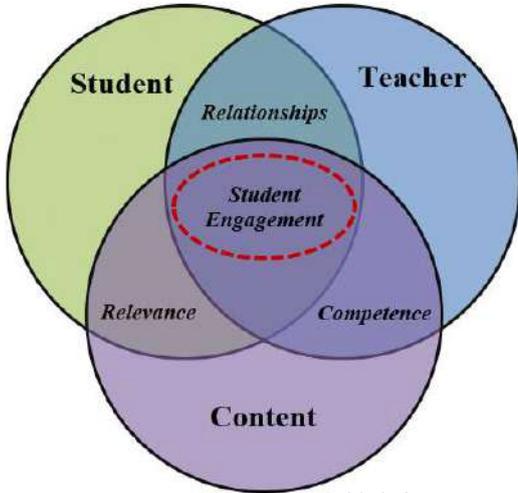
学生エンゲージメントの類型 (山田, 2018a : 2018b)

領域	行動的	認知的	情緒的
中心	参加 (participation)	投資 (investment)	感情 (emotion)
教職員	①教育活動（授業、学生指導）への授業内外での積極的な関与、教育改革・改善や研修等への参加など	②学生が複雑な考えを理解し、困難なスキルを習得するために必要な努力を惜しまず熱心に取り組む	③教育や授業、学生に対する肯定的／否定的反応。興味、意欲、帰属意識、愛着、幸福、満足、不安など
学生	④授業への出席、学習場面での積極的な参加、授業外学習時間、学校行事への参加など	⑤複雑な考えを理解し、困難なスキルを習得するために必要な努力を惜しまず熱心に取り組む	⑥教師や仲間、学業や学校に対する肯定的／否定的反応。興味、意欲、帰属意識、愛着、幸福、満足、不安など

18

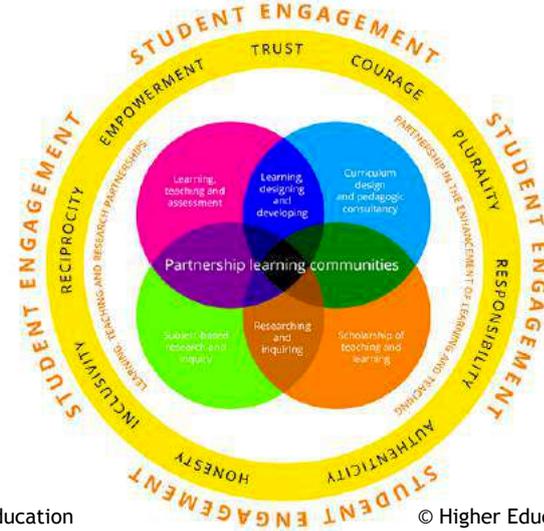
学生エンゲージメントを捉える枠組み

The Student Engagement Core Model



© 2013 the American Secondary Education

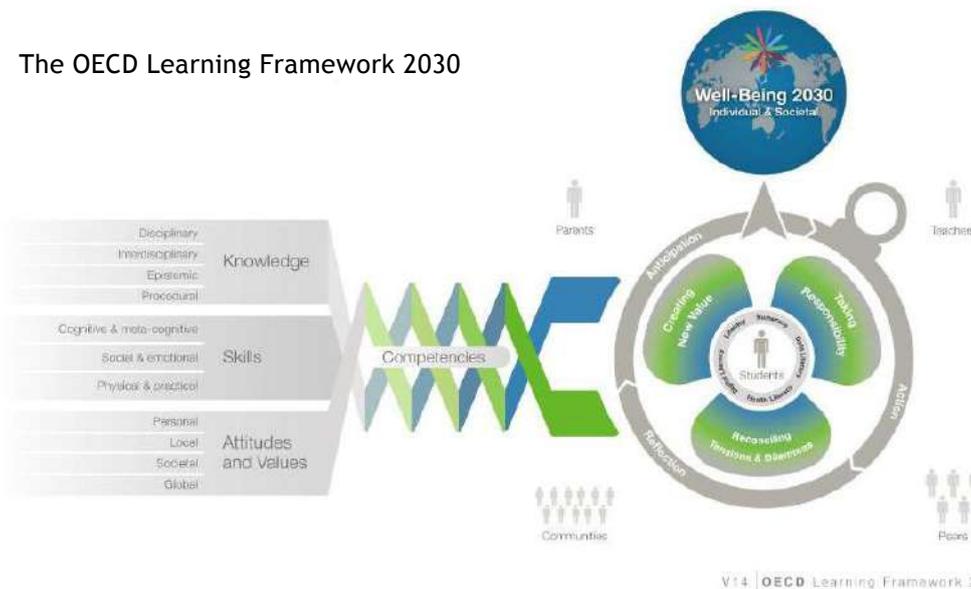
HEA framework for student engagement through partnership



© Higher Education Academy. 2015

“The Future of Education and Skills: Education 2030” (OECD, 2018) における「ウェルビーイング/幸福感」に関わる記述

The OECD Learning Framework 2030



共有しているビジョン

私たちに、全ての学習者が、一人の人間として全人的に成長し、その潜在能力を引き出し、個人、コミュニティ、そして地球のウェルビーイングの上に築かれる、私たちの未来の形成に携わっていくことができるように支えていく責務がある。

新たに追加された3つの “Transformative Competencies”

- Creating new value
- Reconciling tensions and dilemmas
- Taking responsibility

“The Future of Education and Skills: Education 2030” (OECD, 2018) における「エージェンシー/(行為)主体性」に関わる記述

(学習者のエージェンシー/Learner Agency)

- エージェンシーは、社会参画を通じて人々や物事、環境がより良いものになるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する。
- エージェンシーは、**進んでいくべき方向性を設定する力や、目標を達成するために求められる行動を特定する力を必要とする。**

(共同エージェンシー/Co-Agency)

- 教育者は学習者の個性を認めるだけではなく、例えば、教師や仲間たち、家族、コミュニティなど、彼らの学習に影響を与えているより幅広い関係性を認識する必要がある。
- この学習枠組みの基礎となる概念が、「共同エージェンシー」であり、**学習者が目指す目標に向かって進んでいくことを支える、双方向的で互恵的な協力関係のことである。**

21

“トランジション”を支えるエンゲージメントを促す学校教育の役割

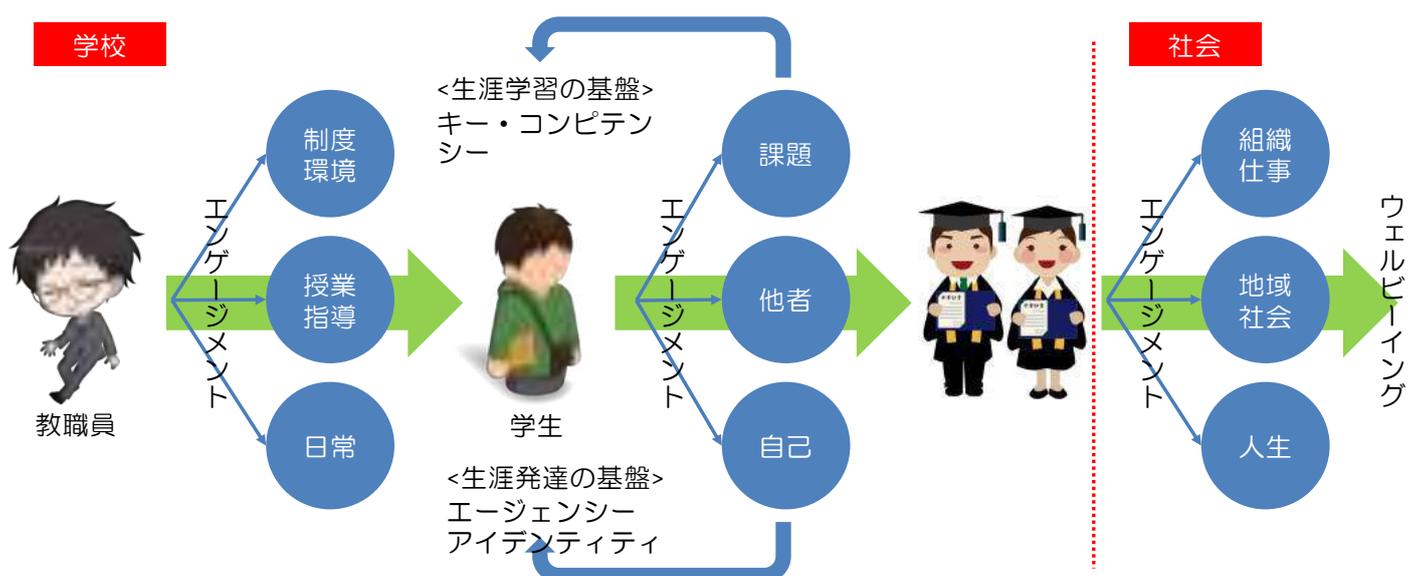


図 トランジションを支えるエンゲージメントを促す学校教育の役割

22

4. データで見るエンゲージメントの意義 ～学生の学びと成長にどう寄与するのか～

23

全国大学生調査（ベネッセ教育総合研究所 2017）

【目的】大学生の学習・生活全般にわたる意識や行動を、多様な観点から明らかにすることを目的に、2008年以来4年ごとに実施。

【調査方法】インターネット調査

【対象】全国の大学1～4年生4,948名

【調査時期】2016年11月18日～12月20日

【調査項目】高校での学習／大学選択で重視した点／入学時の期待／大学生活で力を入れたこと／大学生生活の過ごし方／履修科目数／評価／教職員との交流／保護者との関係／友だち関係／大学教育観／学びの機会／学びに対する姿勢・態度／大学生活で身についたこと／海外留学の意向／進路意識／建学の精神やポリシーの認知／大学生生活の満足度／学びの充実／成長実感／社会観・就労観／投票行動など

<過去の調査>

第1回（2008年10月上旬）／4,070名（男子2,439名、女子1,631名）

第2回（2012年11月上旬）／4,911名（男子2,791名、女子2,120名）

<調査企画・分析メンバー>

川嶋太津夫（大阪大学）・杉谷祐美子（青山学院大学）・山田剛史（京都大学）・
谷田川ルミ（芝浦工業大学）・ベネッセ3名



報告書URL（https://berd.benesse.jp/up_images/research/000_daigakusei_all.pdf）

使用する変数の概要と要約統計量 (山田, 2018a ; 2018b ; 2018c)

使用する変数の概要と要約統計量						
領域	項目内容(因子)	項目内容(例)	項目数	得点範囲	信頼性(α)	平均値(SD)
教員関与	AL型授業の経験(行動的)					
	F1.教室AL	ディスカッション, グループワークなど	3	3-12	.838	8.32 (2.21)
	F2.教室外AL	実験・調査, 教室外体験など	3	3-12	.726	7.19 (2.39)
	教員サポート(情緒的)	教員による相談や支援, 指導, 熱意など	5	5-20	.809	13.34 (3.15)
学生関与	学習への関与(行動的)					
	F1.主体的な学び	予復習, 自主学習, 計画性・継続性など	8	8-32	.878	20.34 (5.15)
	F2.成績重視の学び	宿題・課題, 履修放棄, 良い成績	3	3-12	.802	9.63 (2.06)
	F3.協働の学び	GWにおける他者配慮や意見表出	2	2-8	.770	5.44 (1.53)
	学習への関与(認知的)	関連付け, 根拠付け, 方略考慮, 粘り強さなど	12	12-48	.892	31.53 (6.84)
	主観的幸福感尺度(伊藤他, 2003)(情緒的)					
	F1.自信	危機的な状況等への関与・解決・対処など	3	3-12	.831	8.13 (1.99)
F2.達成感	期待通りの学生生活, 成功, やりとげている	3	3-12	.807	7.78 (2.13)	
学習成果	学習成果(汎用的能力)の獲得感	論理的・批判的思考, 問題解決, 協調性など	19	19-76	.937	51.40 (10.69)
心理発達	アイデンティティ尺度(畑野他, 2014)	何になりたいか, どんな人間か, 重要なことなど	5	5-30	.850	19.19 (5.01)
	主観的幸福感尺度(伊藤他, 2003)					
	F3.人生に対する前向きな気持ち(満足感)	全体的に見て幸せ, 人生が面白いなど	3	3-12	.823	8.58 (2.12)

25

RQ1. 学生によるエンゲージメントは、教員によるエンゲージメント（行動面）、学習成果や心理発達とどのように関連するか

各変数間の相関関係

	エンゲージメント(教員)			エンゲージメント(学生)					学習成果	心理発達		
	TB1	TB2	TE	SB1	SB2	SB3	SC	SE1	SE2	LO	P1	P2
教員関与1.教室AL(TB1)	1											
教員関与2.教室外AL(TB2)	.459**	1										
教員関与3.教員サポート(TE)	.365**	.412**	1									
学生関与1.主体的学び(SB1)	.299**	.375**	.430**	1								
学生関与2.成績重視の学び(SB2)	.205**	.174**	.262**	.457**	1							
学生関与3.協働の学び(SB3)	.427**	.316**	.371**	.527**	.374**	1						
学生関与4.深い学び(SC)	.348**	.422**	.471**	.744**	.448**	.527**	1					
学生関与5.自信(SE1)	.208**	.253**	.325**	.376**	.243**	.352**	.429**	1				
学生関与6.達成感(SE2)	.182**	.240**	.365**	.355**	.233**	.306**	.384**	.664**	1			
学習成果.汎用的能力(LO)	.411**	.408**	.510**	.640**	.404**	.566**	.723**	.531**	.481**	1		
心理発達1.アイデンティティ(P1)	.218**	.272**	.341**	.408**	.219**	.348**	.445**	.606**	.554**	.517**	1	
心理発達2.人生満足感(P2)	.208**	.190**	.327**	.255**	.214**	.286**	.318**	.654**	.675**	.436**	.529**	1

・学生エンゲージメント（行動）は、心理的成長とそう強く関連しない（深い学びは中程度あり）
 ・深い学びは、汎用的能力に強く関連（教室ALより教室外ALの方と強く関連）
 ・汎用的能力は、主体的学び、深い学びと強く関連
 ・汎用的能力は、アイデンティティや人生満足度と強く中程度から強い関連
 ・汎用的能力には、教員より学生自身によるエンゲージメントが強く関連

注1) ** p<.01 注2) 相関係数.500以上にはボールド+下線、.400～.499にはボールド表記
 注3) 略号は、T(Teacher)・S(Student), B(Behavioral)・C(Cognitive)・E(Emotional), P(Psychological)

26

RQ2. 教員によるエンゲージメント（情緒面）は、学生エンゲージメントや学習成果、心理発達を促すか

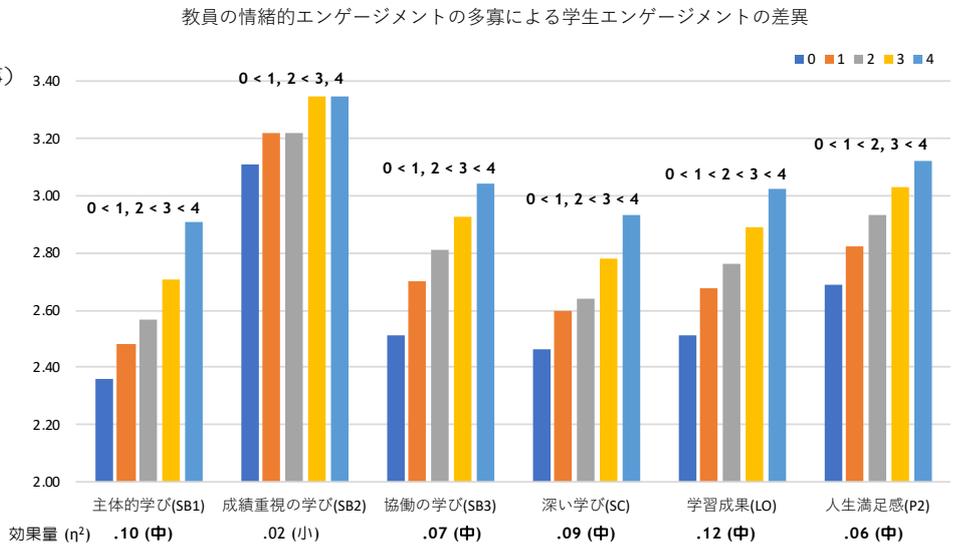
「関わってくれる大学の教員」として、以下に該当する個数（0～4）*を独立変数とした一要因分散分析

1. 気軽に相談できる
2. ふだんから気にかけてくれる
3. 厳しいことを言ってくれる
4. 授業や研究活動以外の場で交流（雑談・食事）がある

* 「いる(1)」「いない(0)」の2件法

・関わってくれる教員の存在は、主体的学び、協働の学び、深い学び、学習成果、そして心理発達を高める可能性

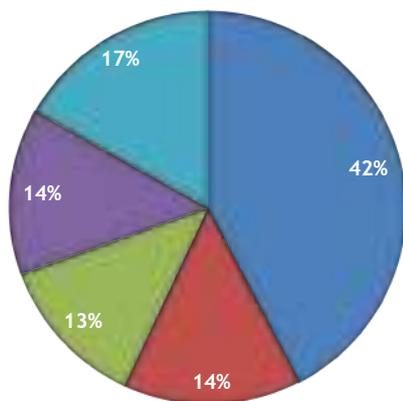
・加えて、総合満足度や転学・退学意向の間でも同様の傾向がみられることから、教員による情緒的な関与は、学生の所属感（Sense of Belongings）を高め、不登校や中退予防にもなる可能性



RQ2. 教員によるエンゲージメント（情緒面）は、学生エンゲージメントや学習成果、心理発達を促すか

関わってくれる教員（4項目）

- 0 (2096名)
- 1 (715名)
- 2 (625名)
- 3 (679名)
- 4 (833名)



教員関係性（学年別割合）



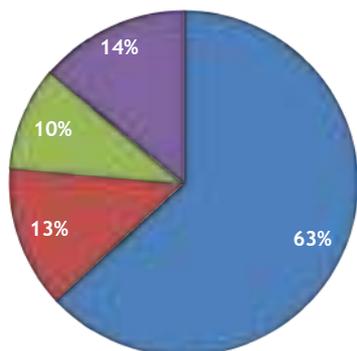
RQ2. 教員によるエンゲージメント（情緒面）は、学生エンゲージメントや学習成果、心理発達を促すか

「関わってくれる大学の職員」の存在（いる・いない）

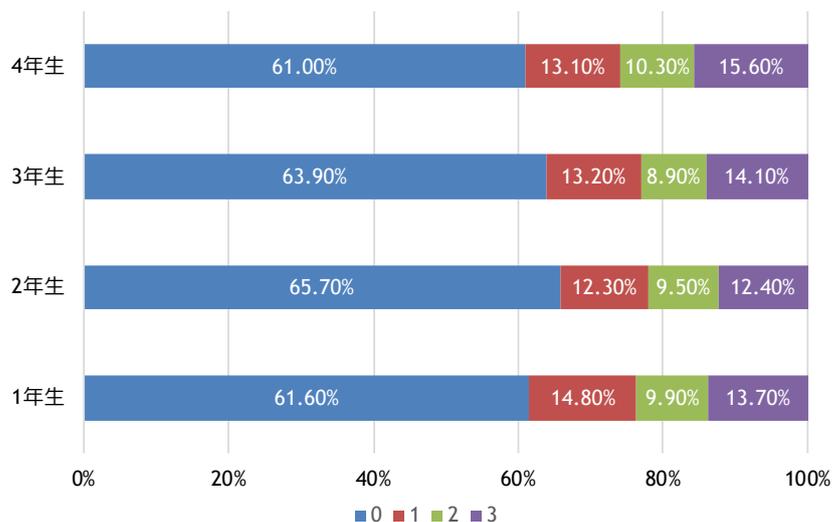
1. 気軽に相談できる
2. ふだんから気にかけてくれる
3. 厳しいことを言ってくれる

関わってくれる職員（3項目）

■ 0 (3120名) ■ 1 (660名) ■ 2 (478名) ■ 3 (690名)



職員関係性（学年別割合）



5. エンゲージメントを高める大学教育実践
～どのような実践がエンゲージメントを高めるのか～

エンゲージメントを高めるための効果的な教育実践の指標

全米大規模卒業生調査

(Gallup & Purdue Univ. 2014 ; 山田訳 2016b)

<主観的幸福感に影響する大学時代の経験>

1. 経験的な深い学び Experiential and deep learning

- ①授業で学んだことを適用できるインターンシップや仕事を持つこと
- ②正課外活動や組織に積極的に関与すること
- ③半期あるいはそれ以上のプロジェクトを完遂すること

2. 情緒的サポート Emotional support

- ④学びについて刺激を与えてくれる教師がいたという感覚
- ⑤母校の教師が人として気にかけてくれているという感覚
- ⑥目標や夢を追いかけるのを勇気づけてくれるメンターがいたという感覚

“Principles for good practice in undergraduate education”

(Chickering & Gamson, 1987 ; 中島・中井, 2005)

1. 教員と学生のコンタクトを促す
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

31

エンゲージメントを高めるための効果的な教育実践の指標

*NSSE (National Survey of Student Engagement) とは、アメリカ・インディアナ大学中等後教育研究所が2000年に開発した全米最大規模の学生行動調査

“Six engagement scale” /NSSE (Coates, 2009; Kuh, 2001を拡張)

1. 学習課題 (academic challenge)
2. アクティブラーニング (active learning)
3. 学生と教職員との交流 (student and staff interactions)
4. 充実した教育経験 (enriching educational experiences)
5. 支援的な学習環境 (supportive learning environment)
6. 職業統合学習 (新たに追加) (work-integrated learning)

学生のエンゲージメントが高い機関に共通する要素 (Kuh et al., 2005 ; 小方, 2008)

- ①生きたミッション
- ②学生の学びに対する一貫した教育観
- ③教育の質を高める環境
- ④学生を成長に導く明確な道筋
- ⑤改善志向的なエトス
- ⑥教育の質や学生の成長に対する責任の共有

“High-impact practices” /NSSE (Kuh 2008)

1. 学習共同体や2科目以上を同じ学生集団が履修するプログラム
2. インターンシップ, フィールド経験, 教育実習, 臨床実習
3. 海外研修プログラム
4. 教職員と取り組む研究プロジェクト
5. 最終年次教育 (最終年次授業, 卒業研究や論文, 修了試験, ポートフォリオ等)
6. 地域に密着したプロジェクト (サービス・ラーニング)



“High-impact practices”に含まれる重要な学習行動 (Bass, 2012 ; 山田, 2016a)

1. 時間と労力をはらっている
2. 本質的な事柄について教員や仲間と相互交流している
3. 多様性を経験している
4. 頻繁なフィードバックに応答している
5. 学習を内省し, 統合している
6. 実社会の体験を通じて, 学習との関連性を探究している

32

最後に～大事なことをもう一度～

1. 「誰のための」「何のための」学校教育かを見定める

- 細分化されたDPや学習成果の獲得は手段であって目的ではない
- 問われるべきは、制度やツールの量ではなく、「関与」の質

2. 学校教育は若者の「人生形成」の一通過点であり、次のステージ（成人期）への移行を支援するという視点から捉える

- 学生が卒業後の長い人生を支える学びと成長の基盤をつくる
- 送り出した学生を待ち受ける「社会」の変化や実態を想像する

3. 教育に発達の見点を

- 教員の役割は、学生が自らこのプロセスを作動できるような関与（環境整備や課題設定、働きかけ）を行うこと
- 発達を見据えた「働きかけ」とは、スキャフォールディング（「足場かけ」直接・間接）であり、甘やかし（過干渉・過保護）ではない

33

引用文献（1／2）

1. 相原総一郎 (2015). 「学生エンゲージメントの一考察—アメリカにおける学生エンゲージメント調査（NSSE）の発展—」 『広島大学高等教育研究開発センター 大学論集』 47, 169-184.
2. Astin, A. W. (1984). Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education, *Journal of College Student Personnel*, 25(4), 297-308.
3. Astin, A.W. (1991). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*. New York: Macmillan Publishing.
4. Bass, R. (2012). Disrupting ourselves: The problem of learning in higher education. *Educause Review*, March/April, 23-33.
5. ベネッセ教育総合研究所 (2017). 『第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書』 (http://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf)
6. Chickering, A.W., & Gamson, Z.F. (1987). Seven principles for good practice in undergraduate education. *AAHE Bulletin*, 3, 3-7.
7. Coates, H. (2009). *Engaging students for success: 2008 Australasian survey of student engagement*. Victoria, Australia: Australian Council for Educational Research.
8. Corso, M. J., Bundick, M. J., Quaglia, R. J., & Haywood, D. E., (2013). "Where student, teacher, and content meet: Student engagement in the secondary school classroom." *American Secondary Education*, 41(3), 50-61.
9. Ewell, P.T. (1988). Outcomes, assessment and academic improvement: In search of usable knowledge. In Smart, John C. (ed.), *Higher Education: Handbook of theory and research*, IV, 53-108.
10. Gallup & Purdue University (2014). *Great Jobs, Great Lives: The 2014 Gallup-Purdue Index Report*.
11. Harper, S. R. & Quaye, S. J. (eds.) (2009). *Student Engagement in Higher Education*. New York and London: Routledge.
12. 畑野快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都筑学 (2014). 「エリクソン心理社会的段階目録（第5段階）12項目版の作成」 『心理学研究』 85(5), 482-487.
13. Healey, M., Flint, A., & Harrington, K. (2014). "Engagement through partnership: Students as partners in learning and teaching in higher education." Higher Education Academy. (Figure 2.3の改訂版)
14. 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」 『心理学研究』 74(3), 276-281.
15. John F. Helliwell, Richard Layard and Jeffrey D. Sachs (Eds.) (2019). "World Happiness Report 2019"
16. Kuh, G.D. (2001). Assessing what really matters to student learning: Inside the national survey of student engagement. *Change*, 33(3), 10-17.
17. Kuh, G.D. (2008). *High-impact educational practices: What they are, who has access to them, and why they matter*. Washington DC: Association of American Colleges and Universities.
18. Kuh, G.D., Kinzie, J., Schuh, John H., & Whitt, Elizabeth J. (2005). *Student success in college*. Jossey-Bass.
19. 葛城浩一 (2006). 「在学生によるカリキュラム評価の可能性と限界」 『高等教育研究』 9, 161-180.

34

引用文献 (2/2)

20. McCormick, A.C., Kinzie, J., & Gonyea, R.M. (2013). Student engagement: Bridging research and practice to improve the quality of undergraduate education. *Higher education: Handbook of theory and research*, 28, 47-92.
21. 中島英博・中井俊樹 (2005). 「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』2, 71-80.
22. 西村和雄・八木匡 (2018) 「幸福感と自己決定—日本における実証研究—」『RIETI Discussion Paper Series 18-J-026』(経済産業研究所)
23. OECD (2018). “The Future of Education and Skills: Education 2030” (文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室 (2018)「教育とスキルの未来：Education 2030【仮訳(案)】」)
24. 小方直幸 (2008). 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11, 45-64.
25. 小方直幸 (2016). 「『質の高い能動的な学び』を引き出すために教員の意識や教育プログラムの総合的な改善が不可欠」『Guideline (河合塾)』2016.4・5, 50-51.
26. Pace, C. R., (1980). Measuring the Quality of Student Effort, *Current Issues in Higher Education*, 2, 10-16.
27. Pace, C. R., (1982). *Achievement and the Quality of Student Effort*, Washington, DC: National Commission on Excellence in Education.
28. Pascarella, E. T. (1985). College Environmental Influences on Learning and Cognitive Development: A Critical Review and Synthesis, *Higher education: Handbook of theory and research*, 1, 1-61.
29. Pascarella, E.T., & Terenzini, P.T. (1991). *How college affect students*. Jossey-Bass.
30. Pascarella, E.T., & Terenzini, P.T. (2005). *How college affect students, vol.2*. Jossey-Bass.
31. Tinto, V. (1986). Theories of Student Departure Revisited, *Higher Education: Handbook of Theory and Research*, 2, 359-384.
32. Trowler, V. (2010). *Student engagement literature review*. The Higher Education Academy, 1-70.
33. Tyler, R. W. et al., (1932). *Service Studies in Higher Education*, Columbus, OH: Ohio State University.
34. 山田剛史 (2016a). 「準正課教育を活かして、カリキュラムを広くとらえよう (特集:カリキュラムを『拡張』しよう!)」『看護教育 (医学書院)』57(3), 168-174.
35. 山田剛史 (2016b). 「〔第1回〕大学教育は学びと成長を促進し、社会生活を支えてくれるのか ベネッセ教育総合研究所, 教育フォーカス〔特集13〕大学での学びと成長～卒業生の観点から振り返る～」(http://berd.benesse.jp/feature/focus/13-learn_growth/activity1/)
36. 山田剛史 (2018a). 「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』18, 155-176.
37. 山田剛史 (2018b). 「学生エンゲージメントが拓く大学教育の可能性～改めて『誰のための』『何のための』教育改革かを考える～」『第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 (ベネッセ教育総合研究所)』31-39.
38. 山田剛史 (2018c). 「学生の学びと発達を促す大学教育とは—学生エンゲージメントの視点から—」山田剛史・松本留奈 (企画ラウンドテーブル) 大規模学生調査を通して大学教育の将来像を考える—学習環境・社会的側面・発達の観点から—, 大学教育学会第40回大会

学習者の主体性や自立を促す取組－教員養成及び小学校の事例から－

秋田大学教育文化学部 細川和仁

- 大学で教職志望の学生を指導する中で、かれらの主体性や自立、学生エンゲージメントをどのように促しているか？
- 主体性や自立を促すことに関して、小学校においてはどのような実践研究が行われているか？他の分野にも共通するところがあるでしょうか。あるいは教職課程ならではの課題も見えるでしょうか。

1. 「エンゲージメントを促す」とは？

- ・ 動機づけ，鼓舞，管理，放任

2. 教職課程において，学生の主体性や自立，「エンゲージメント」を促すしかけ（要素・要因）

- ・ 自由度が少ない教職課程のカリキュラム
- ・ 教職自主ゼミ（教職を目指す学生が主体的に取り組む教員採用試験対策）
- ・ 個々の授業の中での（こまごまとした）取り組み

★ベースにある教員像：どのような教師になってもらいたいのか

3. 附属小学校の研究テーマ「自律した学習者を育てる」

- ・ アクティブラーニング，主体的・対話的で深い学びを目指した授業研究。
- ・ 「自律した学習者」とは
「自分自身の学びを省察し，自ら設定した目標に向け必要な学習内容や方法を決定し，学び続けていく学習者」
- ・ 自らの現状を正しく分析し目標を設定する力，多様な学習方法を身に付け状況に応じて適切なものを選択し用いる力，目標に照らして達成状況を吟味し学習方法をよりよいものへと修正していく力
- ・ 授業における「省察」の工夫

4. ブーメラン：自律した学習者を育てる仕事に携わる教師を育てる

- ・ 教員養成としての課題
- ・ 教員研修としての課題
- ・ 大学教育の質としての課題

【文献】

- ・ 田口力『世界基準の部下の育て方』, KADOKAWA, 2019年
- ・ 小方直幸「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」, 高等教育研究, 11, pp.45-64, 2008年
- ・ 山田剛史「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」, 名古屋高等教育研究, 18, pp.155-176, 2018年

令和元年 10 月 12 日(土)



●教育実践事例報告

学生自主研究制度
～学生の好奇心に応える教育プログラム～



秋田県立大学 生物資源科学部応用生物科学科
准教授 水野 幸一

学生自主研究制度

～学生の好奇心に応える教育プログラム～

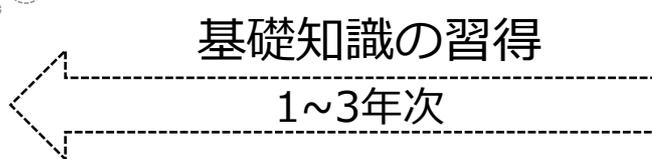
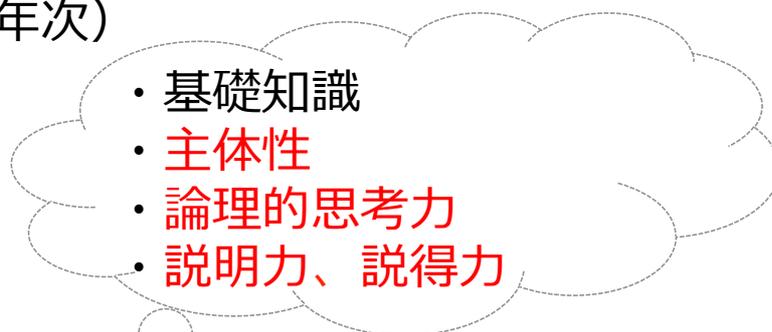
内 容

- 学生自主研究制度について
- 学生自主研究制度の特徴
- 学生自主研究テーマの紹介
- 学生自主研究制度の効果

1

学生自主研究制度について

卒業研究（4年次）



入
学

2

学生自主研究制度について



学生自主研究は、
卒業研究や就職活動という
高い壁を登るための

階 段

みたいなものです。

3

学生自主研究制度について

■ 目 的 :

学生の自主的な学習・研究を推奨するため、**学生自らが行う研究活動**に対して支援を行う。

■ 方 法 :

設定した研究テーマに基づき、研究計画を立て、教員の指導のもとに研究活動を行う。



学生が**主体的に考え、行動し、研究できる!**

4

学生自主研究制度について



- **応募資格**： 学部の1・2年生
(個人 or グループ)
- **研究期間**： 原則1年間
- **助成額**： 上限15万円
- **採択方法**： 学生自主研究審査会で
計画内容を審査し、採択の可否と助成額を決定。
助成額は調整されることもある。
- **その他**： 一人につき1グループまで。



5

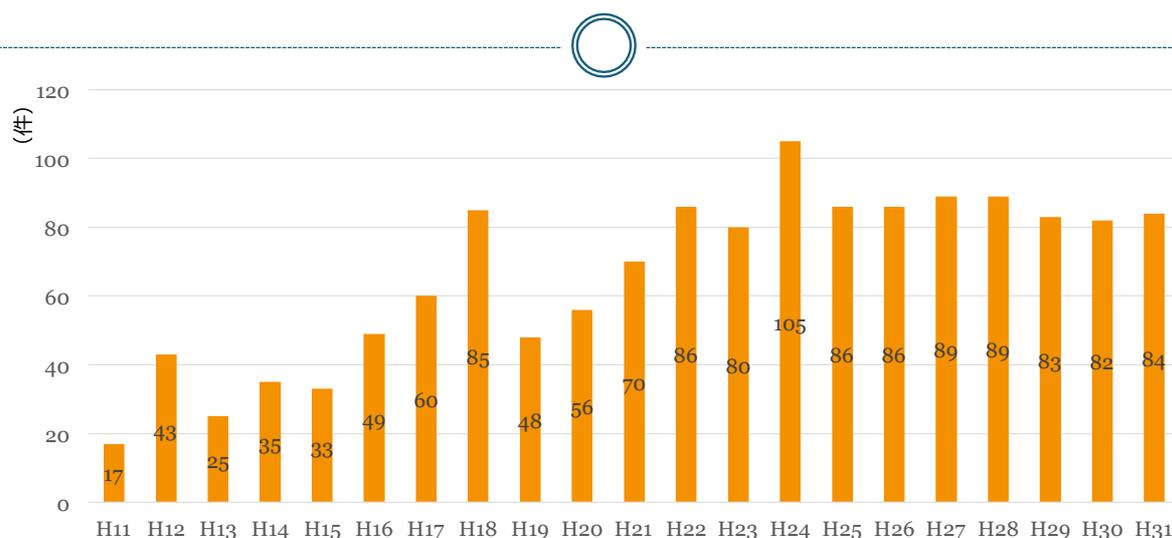
学生自主研究制度の特徴



- **制度の主役は学生自身！**
入学前から興味を持っているテーマや、これから自分に取り組もうとする分野に積極的に取り組むことができる。
- 「入学したら直ぐに研究に取り組んでみたい！」
「早く専門分野に触れてみたい！」
「就職を考えている分野の研究に触れてみたい！」
そんな**積極的な学生の期待に応える制度**

6

学生自主研究制度の特徴



開学当初の平成11年度から実施。
これまでに積み上げた研究テーマは1,391件。

7

学生自主研究制度の特徴

■ サイエンスインカレ

文部科学省が平成23年度から開催。
毎年、学生自主研究で高評価を得た学生がエントリーし、**入賞**も果たしている。

■ アドバンスト自主研究

平成25年度から、システム科学技術学部で実施。
3年生前期の学生に対し、早期から研究室との関わりを与えることで、卒業研究へ繋がる専門研究を実践できるようにする。

8

学生自主研究制度の特徴

アドバンスト自主研究（3年次）

より専門的な研究活動が可能！

専門知識を学べる



卒業研究

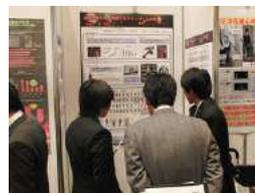
サイエンスインカレ

全国のステージで研究成果発表！

説明力、説得力を磨く

学生自主研究（1～2年次）

主体性+論理的思考力を鍛える



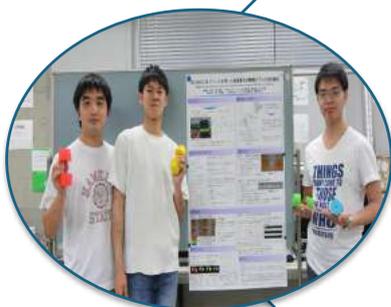
就職・進学

9

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕

3D CADと3Dプリンタを用いた鉄道車両の輪軸モデルの設計製作



自主研究で得たものは？

- 設計案や実験方法をチーム全体で考えることによって、メンバーそれぞれが自ら試行錯誤し行動に移すための考える力、またチームワークを意識して物事に取り組む姿勢が大きく得られたと思います。

10

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕
女性ファッションの流行



自主研究で得たものは？

- アンケートを取る際に、実際に一般の方や、校長先生方と話す機会があったため、**コミュニケーション能力の向上**につながりました。また、物事に粘り強く取り組むことを覚えました。

11

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕
有用酵素をもつ菌を秋田の温泉から探そう



自主研究の良いところは？

- 1つめは、自分が興味があることを1年生のうちから深く研究できる点です。2つ目は、先生との距離が近いことです。3つ目に、**学習意欲が高まる**という点です。

12

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕
伝統野菜「湯沢ぎく」の特性調査



自主研究の良いところは？

- 同じ分野に興味を持つ友人と協力することで、**考えや知識を共有しながら楽しく研究できます**。また、各専門分野の先生が研究をサポートして下さるため、より深く、より詳しく学ぶことができます。

13

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕
マタタビの白化葉の昆虫誘引について

サイエンス
インカレ
「Future
賞」受賞！



自主研究で得たものは？

- 研究発表の際は自分の研究を全く知らない人に分かりやすく伝えられるように工夫して話すことを心がけました。今後様々な場面で活かせるプレゼンテーション力も身につけることができたと思います。

14

学生自主研究テーマの紹介

〔研究テーマ〕
マタタビの白化葉の昆虫誘引について

サイエンス
インカレ
「Future
賞」受賞！

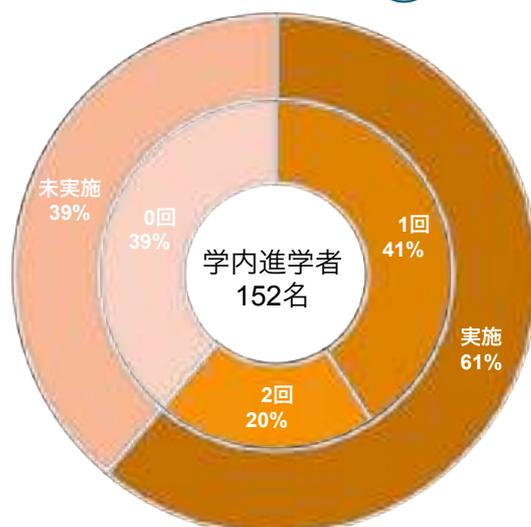
Future賞 受賞の感想は？



- まさか受賞することができるとは思っていませんでした。高校から続けてきた研究が高く評価して頂いたことを、大変光栄に思うと同時に、自主研究を続けてきて良かったと心から思いました。

15

学生自主研究制度の効果



博士前期課程在籍者で
学内進学者のうち、
学部生のときに
学生自主研究を
実施した者の割合

大学院進学者の約6割が、学部生時代に学生自主研究を経験。

16

学生自主研究制度の効果



- 学生が主体的に研究計画を立て、経費の申請を行い、指導教員は必要最低限のアドバイスを行う。
→ 学生が自ら問題を発見し、解決する能力を身につけることができる。
- 高校時代から温めていたテーマはもちろん、「やってみたいけど、アプローチが分からない」という学生でも、教員と相談して申請可能。
→ 日頃の学習や生活の中で得た知的好奇心を活かした学習ができる。

17

学生自主研究制度の効果



- 本学学生にとって、充実したキャンパスライフを送るうえで欠かせないプロジェクト。卒業研究や大学院進学に向けての大きなアドバンテージとなっている。



18

産学官民連携としての JR東日本寄付講座の取り組み

公立大学法人国際教養大学
アジア地域研究連携機構
副機構長・准教授 根岸 洋



公立大学法人
国際教養大学
Akita International University
Japan's First Public University Corporation
Supported by Akita Prefecture

祐克

白石

1

共通テーマ

「正課内外で学生の主体性や自立を促す
組織的な取り組み」

- 「主体的」な学生像とは？
- 研究室・ゼミがない大学で「組織的な取り組み」？





課題解決型学習（PBL）× 産学連携

- フィールドワークのための予算がない...
→ 外部資金（JR東日本）を使っての寄付講座
- 大学生が主体性を持って学ぶ事柄とは？
→ 地域活性化+観光
- 国際教養大学の資源、交換留学生は？
→ チームで学ぶスタイルのPBLが望ましい
- スタッフが足りない...
→ 前年度の受講生や地域おこし協力隊、提携校の教員を巻き込む



ただの観光学はやりたくないの…

2016～2019年度 秋学期寄附講座概要

講座名	遺産観光論：東北の持続可能な地域観光を目指して		
開講趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然や伝統、文化を活用した自立的観光を担う人材、観光を通してグローバル社会で活躍する人材を育成。 ○ 秋田県を筆頭に東北地方の持続可能な観光を考える上で必要不可欠な、遺産の保全と観光活用という学際的分野に関し、様々なステークホルダーとの協働により実践的に学修。 ○ 市場拡大・活性化が喫緊の課題である東北地方の観光を取り扱い、地域の実情に即したマーケティング、ブランディング、コンセプトメイクを学修。 		
受講生数	2019年度：正規生8名、交換留学生9名	実施期間	秋学期（9月～12月）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 講義：当社、外部有識者（東北観光推進機構、男鹿市関係者、地元観光関連企業、JTBF） ○ 演習：グループ討議・プレゼンテーション、地域でのワークショップ、男鹿市内を中心としたフィールドワーク、アンケート調査等 ○ 成果発表：男鹿市内・男鹿線沿線域における、観光による地域活性化と「男鹿のナマハゲ」、「大龍寺」等の文化遺産の持続的発展に関するグループプレゼンテーション ○ 目指す成果：若い世代と地域の方々が交流し、議論する場を作ること 		

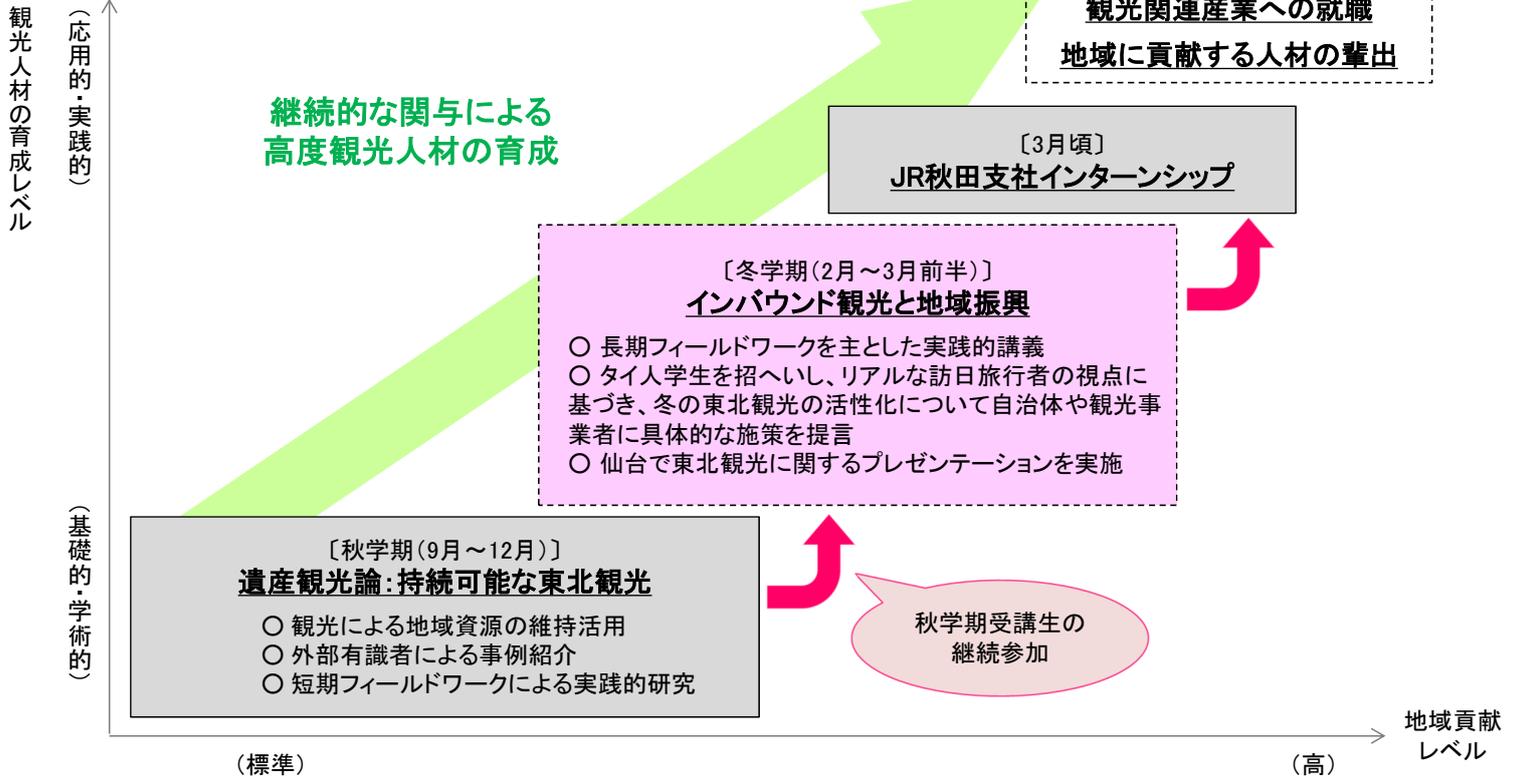


集中講義、インバウンド観光、提携校との連携

開講趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国際教養大学と提携校であるカセサート大学(タイ)両国の教員・学生が協働することで、日本全体の訪日外国人のうち1%しか訪れていない東北観光の現状を変える実践的方策について、両国で行うフィールドワークを通じて実践的に学ぶ国際課題解決型講義(PBL)。 ○ インバウンドの主要なマーケットの一つであり、将来的には知事等によるトップセールス等も想定されるタイにおいて、市場拡大・活性化が喫緊の課題である東北地方の観光を取り扱い、地域の実情に即したマーケティング、ブランディング、コンセプト作りを学ぶ。 ○ タイでのマーケティング調査、東北地方で冬期に行われる伝統行事や祭りを題材にしたフィールドワークを通じて、タイ人に受け入れられやすい観光商品作り、観光地作りの方法について学び、成果を東北観光推進機構をはじめとした観光関連者に広くフィードバックすることで、今後の東北地方のインバウンド旅客の流入増等にも貢献する。 		
講座名	GBP333 インバウンド観光と地域振興（JR東日本寄附講座）	受講生数	18名（国際教養大学学生8名、カセサート大学学生10名）
講師	国際教養大学1名、カセサート大学2名	実施期間	冬季プログラム
予算	教員・受講生の旅費・宿泊費の補助、外部講師への謝金		

実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 開講前のスケジュール シラバス策定期間：2019年6月、受講生募集開始：2019年9月、受講生決定：2019年10月 ○ 寄附講座のスケジュール ・ステージ1〔於：国際教養大学、2020年2月の5日間(9:00-11:45)〕 ※国際教養大学学生のみ、カセサート大学においても同様の講義を行う予定 ・ステージ2〔於：国際教養大学及び宮城県・秋田県内のフィールドワーク先、2020年2月の10日間(9:00-11:45及び野外講義)〕 東北観光推進機構（宮城県仙台市）、東北地方における冬期観光資源（横手のかまくら祭り等）、宿泊施設、温泉等でのフィールドワーク 県内自治体、東北観光推進機構、地域住民を対象にした、東北の冬の観光を活性化プランのプレゼンテーションを実施（中間発表） ※国際教養大学・カセサート大学の学生合同 ステージ3〔於：東北観光推進機構でのプレゼンテーション、2020年2月〕 冬の東北観光をテーマにしたプレゼンテーションを実施（最終発表） ※国際教養大学・カセサート大学の学生合同 ○ 講義のスタイル 各種教材を用いる教室での講義、フィールドワーク先での聞き取り調査及びアンケート調査、グループ討論とプレゼンテーション、ゲスト講義（東北観光推進機構職員、秋田県観光文化スポーツ部職員、JR東日本秋田支社社員、タイでの観光事業者等を想定） 		
------	--	--	--

企業が考える「成果」＝即効性のある人材育成 大学教員として考える人材育成は？



2018年度JR東日本寄附講座公開成果報告会

東北文化観光フォーラム2018

Heritage of Tourism 2018

2018年12月8日（土）14:00-16:15
会場：国際教養大学A棟4階講堂（秋田市増和）
主催：国際教養大学アジア地域研究連携機構
後援：男鹿市

Date & Time: December 8 (Sat) 14:00-16:15
Venue: Auditorium, 4F, A-Bldg, Akita International University
Host: Institute for Asian Studies and Regional Collaborator, AIU

協力：男鹿市観光協会、真山神社、熊鷹浜科、里山のカフェにぎ、男鹿温泉交流会観光五風

2018年度JR東日本寄附講座
国際教養大学秋学期
「JAS385遺産観光論：持続可能な東北観光」
公開成果報告会

Debriefing Session of JR-EAST Funded Course 2018.
Akita International University
JAS385: Sustainable Heritage Tourism in Tohoku Region

13:45	開場
14:00-14:05	開会挨拶 梶谷 基雄 (国際教養大学アジア地域研究連携機構 機構長・教授)
14:05-14:15	講座説明 梶原 洋 (国際教養大学アジア地域研究連携機構 助教)
14:10-15:45	講座受講生によるグループ発表 「訪日外国人観光客、特に個人客・少人数を対象とした男鹿の持続可能な観光開発」
15:45-16:05	グループ発表に対する質疑応答
16:05-16:15	閉会挨拶 向田敏弘 (JR東日本総合企画本部観光戦略室)

大学教員が考える「成果」

Oceania, 8
USA, 5
Europe, 14
SE Asia, 16
Taiwan & China, 17
Thailand, 42

60代以上, 7
50代, 10
40代, 9
30代, 43
10-20代, 33

大学が考えるべき「主体的・対話的」な学びとは？

- 外国人観光客にアンケート調査ができ、留学生とも議論できるような学生を育成すること？
- アクティブ・ラーニングを取り入れること？
- 企業を驚かせるようなことができないか？



秋田公立美術大学

コミュニティデザイン演習の記録 彌高神社オリジナル御守袋デザインの実践報告

コミュニケーションデザイン専攻

教授 官能 右泰

ち

授業概要

産学連携実践授業による実践体験とリサーチを基本にして、御守の実製作のための演習授業を展開する。また、学外体験授業の充実によって、企画・提案力とコミュニケーション力を身につけさせ、クリエイター・アートディレクターとしての幅広い感性を養うことを目的としている。 [2年次・通年選択科目・4単位]

授業形態

グループ[3名]によるデザイン製作

学外体験授業[全体時間数の50%]

神輿渡御祭・例祭[宵宮祭・生誕祭]

巫女体験・自主活動

体験授業 1

神輿渡御祭・例祭宵宮祭

[催事・神事を体験する]





学外授業 1

中間・最終プレゼンテーション

[神社・御守業者とのデザイン提案]







ち

学外授業 2

台紙デザイン・詰め込み作業







体験授業 2

巫女体験

[御守の授与状況の確認]





学外自主活動

美大ギャラリーでの展覧会企画







学生が自主的に取り組む理由

- 産学連携実践・体験授業であること。
 - 企画力・コミュニケーション力が身につくとともに幅広い感性を養うことができる個別指導であること。
 - 就活プレゼンに必要な「ポートフォリオ」作成の最も重要な実践的デザイン作品となること。
- 学生評価アンケート 4,8～4,9点[5点満点]

「大学コンソーシアムあきた」とは

秋田県内の大学等が連携・協力することにより、それぞれの教育・活動を活性化するとともにその成果を地域社会に還元し、地域の発展に貢献することを目的として、平成 17(2005)年 3 月に設立された団体です。

			
秋田大学	秋田県立大学	国際教養大学	秋田公立美術大学
			
ノースアジア大学	秋田看護福祉大学	日本赤十字秋田看護大学	秋田栄養短期大学
			
聖霊女子短期大学	聖園学園短期大学	日本赤十字秋田短期大学	秋田工業高等専門学校
			
放送大学秋田学習センター	秋田職業能力開発短期大学校	秋田県あきた未来創造部 あきた未来戦略課高等教育支援室 秋田県 高等教育支援室	大学コンソーシアムあきた